

A person's torso and arms are visible, wrapped in a white cloth. They are holding a wooden paddle over a mask that has been smeared with red, resembling blood. The mask has dark markings around the eyes and mouth. The background is dark and smoky.

ドグラ・マグラ

夢野久作

胎児よ

胎児よ

何故躍る

母親の心がわかって

おそろしいのか



.....ブウ——ンンン——ンンンン.....。

私がウスウスと眼を覚ました時、こうした蜜蜂（みつばち）の唸（うな）るような音は、まだ、その弾力の深い余韻を、私の耳の穴の中にハッキリと引き残していた。

それをジッと聞いているうちに.....今は真夜中だな.....と直覚した。そうしてどこか近くでボンボン時計が鳴っているんだな.....と思い思い、又もウトウトしているうちに、その蜜蜂のうなりのような余韻は、いつとなく次々に消え薄れて行って、そこいら中がヒッソリと静まり返ってしまった。

私はフッと眼を開いた。

かなり高い、白ペンキ塗の天井裏から、薄白い塵埃（ほこり）に蔽（おお）われた裸の電球がタッターつブラ下がっている。その赤黄色く光る硝子球（ガラスだま）の横腹に、大きな蠅（はえ）が一匹とまっていて、死んだように凝然（じっ）としている。その真下の固い、冷めたい人造石の床の上に、私は大の字型（なり）に長くなって寝ているようである。

.....おかしいな.....。

私は大の字型（なり）に凝然（じっ）としたまま、瞼（まぶた）を一パイに見開いた。そうして眼の球（たま）だけをグルリグルリと上下左右に廻転さしてみた。

青黒い混凝土（コンクリート）の壁で囲まれた二間（けん）四方ばかりの部屋である。

その三方の壁に、黒い鉄格子と、鉄網（かなあみ）で二重に張り詰めた、大きな縦長い磨硝子（すりガラス）の窓が一つ宛（ずつ）、都合三つ取付けられている、トテも要心（ようじん）堅固に構えた部屋の感じである。

窓の無い側の壁の付け根には、やはり岩乗（がんじょう）な鉄の寝台が一個、入口の方向を枕にして横たえてあるが、その上の真白な寝具が、キチンと敷き展（なら）べたままになっているところを見ると、まだ誰も寝たことがないらしい。

.....おかしいぞ.....。

私は少し頭を持ち上げて、自分の身体（からだ）を見廻わしてみた。

白い、新しいゴワゴワした木綿の着物が二枚重ねて着せてあって、短かいガーゼの帯が一本、胸高に結んである。そこから丸々と肥（ふと）って突き出ている四本の手足は、全体にドス黒く、垢だらけになっている.....そのキタナラシサ.....。

.....いよいよおかしい.....。

怖（こ）わ怖（ご）わ右手（めて）をあげて、自分の顔を撫（な）でまわしてみた。

.....鼻が尖（と）んがって.....眼が落ち窪（くぼ）んで.....頭髪（あたま）が蓬々（ぼうぼう）と乱れて.....顎鬚（あごひげ）がモジャモジャと延びて.....。

.....私はガバと跳ね起きた。

モウ一度、顔を撫でまわしてみた。

そこいらをキョロキョロと見廻わした。

.....誰だろう.....俺はコンナ人間を知らない.....。

胸の動悸がみるみる高まった。早鐘を撞（つ）くように乱れ撃ち初めた.....呼吸が、それに連れて荒くなった。やがて死ぬかと思うほど喘（あえ）ぎ出した。.....かと思うと又、ヒッソリと静まって来た。

.....こんな不思議なことがあるか.....。

.....自分で自分を忘れてしまっている.....。

.....いくら考えても、どこの何者だか思い出せない。.....自分の過去の思い出としては、たった今聞いたブウ——ンンンというボンボン時計の音がタッターつ、記憶に残っている。.....ソレ

ッ切りである……。

……それでいて気は慥（たし）かである。森閑（しんかん）とした暗黒が、部屋の外を取巻いて、どこまでもどこまでも続き広がっていることがハッキリと感じられる……。

……夢ではない……たしかに夢では……。

私は飛び上った。

……窓の前に駈け寄って、磨硝子の平面を覗いた。そこに映った自分の容貌（かおかたち）を見て、何かの記憶を喚（よ）び起そうとした。……しかし、それは何にもならなかった。磨硝子の表面には、髪の毛のモジャモジャした悪鬼のような、私自身の影法師しか映らなかった。

私は身を翻（ひるがえ）して寝台の枕元に在る入口の扉（ドア）に駈け寄った。鍵穴だけがポツンと開いている真鍮（しんちゅう）の金具に顔を近付けた。けれどもその金具の表面は、私の顔を写さなかった。只、黄色い薄暗い光りを反射するばかりであった。

……寝台の脚を探しまわった。寝具を引っくり返してみた。着ている着物までも帯を解いて裏返して見たけれども、私の名前は愚（おろ）か、頭文字らしいものすら発見し得なかった。

私は呆然となった。私は依然として未知の世界に居る未知の私であった。私自身にも誰だかわからない私であった。

こう考えているうちに、私は、帯を引きずったまま、無限の空間を、ス——ッと垂直に、どこへか落ちて行くような気がしはじめた。臓腑（はらわた）の底から湧き出して来る戦慄（せんりつ）と共に、我を忘れて大声をあげた。

それは金属性を帯びた、突拍子（とっぴょうし）もない甲高（かんだか）い声であった…
…が……その声は私に、過去の何事かを思い出させる間もないうちに、四方のコンクリート壁に吸い込まれて、消え失せてしまった。

又叫んだ。……けれども矢張（やは）り無駄であった。その声が一しきり烈（はげ）しく波動して、渦巻いて、消え去ったあとには、四つの壁と、三つの窓と、一つの扉が、いよいよ厳粛に静まり返っているばかりである。

又叫ぼうとした。……けれどもその声は、まだ声にならないうちに、咽喉（のど）の奥の方へ引返してしまった。叫ぶたびに深まって行く静寂の恐ろしさ……。

奥歯がガチガチと音を立てはじめた。膝頭（ひざがしら）が自然とガクガクし出した。それでも自分自身が何者であったかを思い出し得ない……その息苦しさ。

私は、いつの間にか喘（あえ）ぎ初めていた。叫ぼうにも叫ばれず、出ようにも出られぬ恐怖に包まれて、部屋の中央（まんなか）に棒立ちになったまま喘いでいた。

……ここは監獄か……精神病院か……。

そう思えば思うほど高まる呼吸の音が、凧（こがらし）のように深夜の四壁に反響するのを聞いていた。

そのうちに私は気が遠くなって来た。眼の前がズウ——と真暗くなって来た。そうして棒のように強直（ごうちやく）した全身に、生汗をビッシヨリと流したまま仰向（あおむ）け様（ざま）にスト——ンと、倒れそうになったので、吾知らず観念の眼を閉じた……と思ったが……又、ハッと機械のように足を踏み直した。両眼をカッと見開いて、寝台の向側の混凝土（コンクリート）壁を凝視した。

その混凝土壁の向側から、奇妙な声が聞えて来たからであった。

……それは確かに若い女の声と思われた。けれども、その音調はトテも人間の肉声とは思えないほど嗶（しゃが）れてしまって、ただ、底悲しい、痛々しい響（ひびき）ばかりが、混凝土の壁を透して来るのであった。

「.....お兄さま。お兄さま。お兄さまお兄さまお兄さまお兄さまお兄さま。.....モウ一度.....今のお声を.....聞かしてエ——ッ.....」

私は愕然（がくぜん）として縮み上った。思わずモウ一度、背後（うしろ）を振り返った。この部屋の中に、私以外の人間が一人も居ない事を承知し抜いていながら.....それから又も、その女の声（こゝろ）を滲（し）み透して来る、コンクリート壁の一部分を、穴のあく程、凝視した。

「.....お兄さまお兄さまお兄さまお兄さまお兄さま.....お隣りのお部屋に居らっしゃるお兄様... ..あたしです。妾（あかし）です。お兄様の許嫁（いいなづけ）だった.....貴方（あなた）の未来の妻でした妾.....あたしです。あたしです。どうぞ.....どうぞ今のお声をモウ一度聞かして... ..聞かして頂戴.....聞かして.....聞かしてエ——ッ.....お兄様お兄様お兄様お兄様.....おにいさまア——ッ.....」

私は眼瞼（まぶた）が痛くなるほど両眼を見開いた。唇をアングリと開いた。その声に吸い付けられるようにヒョロヒョロと二三歩前を出た。そうして両手で下腹をしっかりと押え付けた。そのまま一心に混 凝土（コンクリート）の壁を白眼（にら）み付けた。

それは聞いている者の心臓を虚空に吊るし上げる程のモノスゴイ純情の叫びであった。臓腑をドン底まで凍らせずには措（お）かないくらいタマラナイ絶体絶命の声であった。.....いつから私を呼び初めたかわからぬ.....そうしてこれから先、何千年、何万年、呼び続けるかわからない真剣な、深い怨（うら）みの声であった。それが深夜の混 凝土壁の向うから私？ を呼びかけているのであった。

「.....お兄さま.....お兄さまお兄さまお兄さま。なぜ.....なぜ返事をして下さらないのですか。あたしです、あたしです、あたしですあたしです。お兄さまはお 忘れになったのですか。妾（あかし）ですよ。あたしですよ。お兄様の許嫁（いいなづけ）だった..... 妾.....妾をお忘れになったのですか。.....妾はお兄様と御一緒になる前の晩に..... 結婚式を挙げる前の晩の真夜中に、お兄様のお手にかかって死んでしまったのです。.....それがチャント生き返って.....お墓の中から生き返ってここに居るのですよ。幽霊でも何でもありませんよ.....お兄さまお兄さまお兄さまお兄さま。.....なぜ返事をして下さらないのですか.....お兄様はあの時の事をお忘れになったのですか.....」

私はヨロヨロと背後（うしろ）に蹠 躑（よろめ）いた。モウ一度眼を皿のようにしてその声の聞こえて来る方向を凝視した.....。

.....何という奇怪な言葉だ。

.....壁の向うの少女は私を知っている。私の許嫁だと云っている。.....しかも私と結婚式を挙げる前の晩に、私の手にかかって殺された.....そうして又、生き返った女だと自分自身で云っている。そうして私と壁一重（ひとえ）を隔てた向うの部屋に閉（と）じ籠（こ）められたまま、ああして夜となく、昼となく、私を呼びかけているらしい。想像も及ばない怪奇な事実を叫びつづけながら、私の過去の記憶を喚び起すべく、死物狂（しにものぐる）いに努力し続けているらしい。

.....キチガイだろうか。

.....本気だろうか。

いやいや。キチガイだキチガイだ.....そんな馬鹿な.....不思議な事が.....アハハハ.....。

私は思わず笑いかけたが、その笑いは私の顔面筋肉に凍り付いたまま動かなくなった。.....又も一層悲痛な、深刻な声が、混 凝土の壁を貫いて来たのだ。笑うにも笑えない.....たしかに私を私と知っている確信にみちみちた.....真剣な.....悽愴（せいそう）とした.....。

「.....お兄さまお兄さまお兄さま。何故（なぜ）、御返事をなさらないのですか。妾がこんなに

苦しんでいるのに……タッター言……タッター言……御返事を……」

「……………」

「……タッター言……タッター言……御返事をして下されば……いいのです。……そうすればこの病院のお医者様に、妾がキチガイでない事が……わかるのです。そうして……お兄様も妾の聲が、おわかりになるようになった事が、院長さんにわかって……御一緒に退院出来るのに………お兄様お兄様お兄様お兄さま……何故……御返事をして下さらないのですか……」

「……………」

「……妾の苦しみが、おわかりにならないのですか……毎日毎日……毎夜毎夜、こうしてお呼びしている声が、お兄様のお耳に這入（はい）らないのですか……ああ……お兄様お兄様お兄様お兄様……あんまりです、あんまりですあんまりです…… あ……あ……あたしは……声がもう……」

そう云ううちに壁の向側から、モウ一つ別の新しい物音が聞え初めた。それは平手か、コブシかわからないが、とにかく生身（なまみ）の柔らかい手で、コンクリートの壁をポトポトとたたく音であった。皮膚が破れ、肉が裂けても構わない意気組で叩き続ける弱々しい女の手の音であった。私はその壁の向うに飛び散り、粘り付いているであろう血の痕跡（あと）を想像しながら、なおも一心に眼を瞠（みは）り、奥歯を噛み締めていた。

「……お兄様お兄様お兄様お兄様……お兄様のお手にかかって死んだあたしです。そうして生き返っている妾です。お兄様よりほかにお便（たよ）りする方は一人もない可哀想な妹です。一人ポッチでここに居る……お兄様は妾をお忘れになったのですか……」

「お兄様もおんなじです。世界中にタッタ二人の妾たちがここに居るのです。そうして他人（ひと）からキチガイと思われて、この病院に離れ離れになって閉じ籠められているのです」

「……………」

「お兄様が返事をして下されば……妾の云う事がホントの事になるのです。妾を思い出して下さいれば、妾も……お兄様も、精神病患者でない事がわかるのです……タッター言……タッターコト……御返事をして下されば……モヨコと……妾の名前を呼んで下されば……ああ……お兄様お兄様お兄様お兄様……ああ……妾は、もう声が……眼が……眼が暗くなって……」

私は思わず寝台の上に飛乗った。その声のあたりと思われる青黒い混凝土（コンクリート）壁に縋（すが）り付いた。すぐにも返事をしてやりたい……少女の苦しみを助けてやりたい……そうして私自身がどこの何者かという事実を一刻も早く確かめたいという、タマラナイ衝動に駆られてそうしたのであった。……が……又グット唾液（つば）を嚙（の）んで思い止（とど）まった。

ソロソロと寝台の上から這（すべ）り降りた。その壁の一点を凝視したまま、出来るだけその声から遠ざかるべく、正反対の位置に在る窓の処までジリジリと後退（あとしぎ）りをして来た。

……私は返事が出来なかったのだ。否……返事をしてはいけなかったのだ。

私は彼女が私の妻なのかどうか全然知らない人間ではないか。あれ程に深刻な、痛々しい彼女の純情の叫び声を聞きながらその顔すらも思い出し得ない私ではないか。自分の過去の真実の記憶として喚び起し得るものはタッタ今聞いた……ブウウン……ンンン……という時計の音一つしか無いという世にも不可思議な痴呆患者の私ではないか。

その私が、どうして彼女の夫（おっと）として返事してやる事が出来よう。たとい返事をしてやったお蔭（かげ）で、私の自由が得られるような事があっても、その時に私のホントウの氏素性（うじすじょう）や、間違いのない本名が聞かれるかどうか、わかったものではない

ではないか。……彼女が果して正気なのか、それとも精神病患者なのかすら、判断する根拠を持たない私ではないか……。そればかりじゃない。

万一、彼女が正真正銘の精神病患者で、彼女のモノスゴイ呼びかけの相手が、彼女の深刻な幻覚そのものに外（ほか）ならないとしたら、どうであろう。私がウツカリ返事でもしようものなら、それが大変な間違いの原因（もと）にならないとは限らないではないか。……まして彼女が呼びかけている人間が、たしかにこの世に現在している人間で、しかも、それが私以外の人間であったとしたらどうであろう。私は自分の軽率（かるはずみ）から、他人の妻を横奪（よこどり）した事になるではないか。他人の恋人を冒涇（ぼうとく）した事になるではないか……といったような不安と恐怖に、次から次に襲われながら、くり返しくり返し唾液（つば）を嚙（の）み込んで、両手をシッカリと握り締めているうちにも、彼女の叫び声は引っ切りなしに壁を貫いて、私の真正面から襲いかかって来るのであった。

「お兄様お兄様お兄様お兄様お兄様。あんまりですあんまりですあんまりですあんまりですあんまりです……」

そのかよわい……痛々しい、幽霊じみた、限りない純情の怨みの叫び……。

私は頭髮（かみ）を両手で引掴んだ。長く伸びた十本の爪（つめ）で、血の出るほど搔きまわした。

「……お兄さまお兄さまお兄さま。妾は貴方（あなた）のものです。貴方のものです。早く……早く、お兄様の手に抱き取って……」

私は掌（てのひら）で顔を烈しくコスリまわした。

……違う違う……違います違います。貴女（あなた）は思い違いをしているのです。僕は貴女を知らないのです……。

……とモウすこしで叫びかけるところであったが、又ハッと口を噤（つぐ）んだ。そうした事実すらハッキリと断言出来ない今の私……自分の過去を全然知らない……彼女の言葉を否定する材料を一つも持たない……親兄弟や生れ故郷は勿論の事……自分が豚だったか人間だったかすら、今の今まで知らずにいた私……。

私は拳骨（げんこつ）を固めて、耳の後部（うしろ）の骨をコツンコツンとたたいた。けれどもそこからは何の記憶も浮び出て来なかった。

それでも彼女の声は絶えなかった。息も切れ切れに……殆ど聞き取る事が出来ないくらい悲痛に深刻に高潮して行った。

「……お兄さま……おにいさま……どうぞ……どうぞあたしを……助けて……助けて……ああ……」

私はその声に追立てられるように今一度、四方の壁と、窓と、扉（ドア）を見まわした。駆け出しかけて又、立止まった。

……何にも聞えない処へ逃げて行きたい……。

と思ううちに、全身がゾーッと粟立（あわだ）って来た。

入口の扉（ドア）に走り寄って、鉄かと思われるほど岩乗（がんじょう）な、青塗の板の平面に、全力を挙げて衝突（ぶつか）って見た。暗い鍵穴を覗いてみた。……なおも引続いて聞こえて来る執念深い物音と、絶え絶えになりかけている叫び声に、痺（しび）れ上るほど脅（おび）やかされながら……窓の格子を両手で掴んでカーパイゆすぶって見た。やっと下の方の片隅だけ引歪（ひきゆが）める事が出来たが、それ以上は人間の力で引抜けそうになかった。

私はガツカリして部屋の真中に引返して来た。ガタガタ慄（ふる）えながらモウ一度、部屋の隅々を見まわした。

私はイッタイ人間世界に居るのであろうか.....それとも私はツイ今しがたから幽暝（あのよ）の世界に来て、何かの責苦（せめく）を受けているのではあるまいか。

この部屋で正気を回復すると同時に、ホッとする間もなく、襲いかかって来た自己忘却の無間（むげん）地獄.....何の反響も無い.....聞ゆるものは時計の音ばかり.....。

.....と思う間もなくどこの何者とも知れない女性の叫びに苛責（さい）なまれ初めた絶体絶命の活（いき）地獄.....この世の事とも思われぬほど深刻な悲恋を、救うことも、逃げる事も出来ない永劫（えいごう）の苛責.....。

私は踵（かかと）が痛くなるほど強く地団駄（じだんだ）を踏んだ.....ベタリと座り込んだ.....仰向けに寝た.....又起上って部屋の中を見まわした。.....聞えるか聞えぬかわからぬ位、弱って来た隣室（となり）の物音と、切れ切れに起る咽（むせ）び泣きの声から、自分の注意を引き離すべく.....そうして出来るだけ急速に自分の過去を思い出すべく.....この苦しみの中から自分自身を救い出すべく.....彼女にハッキリした返事を聞かすべく.....。

こうして私は何十分の間.....もしくは何時間のあいだ、この部屋の中を狂いまわったか知らない。けれども私の頭の中は依然として空虚（からっぽ）であった。彼女に関係した記憶は勿論のこと、私自身に就（つ）いても何一つとして思い出した事も、発見した事もなかった。カラッポの記憶の中に、空（から）っぽの私が生きている。それがアラレもない女の叫び声に逐（お）いまわされながら、ヤミクモに藻掻（もが）きまわっているばかりの私であった。

そのうちに壁の向うの少女の叫び声が弱って来た。次第次第に糸のように甲走（かんばし）って来て、しまいには息も絶え絶えの泣き声ばかりになって、とうとう以前（もと）の通りの森閑とした深夜の四壁に立ち帰って行った。

同時に私も疲れた。狂いくたびれて、考えくたびれた。扉（ドア）の外の廊下の突当りと思うあたりで、カックカックと調子よく動く大きな時計の音を聞きつつ、自分が突立っているのか、座っているのか.....いつ.....何が.....どうなったやらわからない最初の無意識状態に、ズンズン落ち帰って行った.....。

.....コトリ.....と音がした。

気が付くと私は入口と反対側の壁の隅に身体（からだ）を寄せかけて、手足を前に投げ出して、首をガックリと胸の処まで項垂（うなだ）れたまま、鼻の先に在る人造石の床の上の一点を凝視していた。

見ると.....その床や、窓や、壁は、いつの間にか明るく、青白く光っている。

.....チュッチュツ.....チョンチョン.....チョン.....チッチッチョン.....。

という静かな雀（すずめ）の声.....遠くに辻（すべ）って行く電車の音.....天井裏の電燈はいつの間にか消えている。

.....夜が明けたのだ.....。

私はボンヤリとこう思って、両手で眼の球（たま）をグイグイとコスリ上げた。グッスリと睡ったせいであつたろう。今朝、暗いうちに起った不可思議な、恐ろしい出来事の数々を、キレイに忘れてしまっていた私は、そこいら中が変に剛（こわ）ばって痛んでいる身体を、思い切ってモリモリモリと引き伸ばして、カーパイの大きな欠伸（あくび）をしかけたが、まだ十分に息を吸い込まないうちに、ハッと口を閉じた。

向うの入口の扉（ドア）の横に、床とスレスレに取付けてある小さな切戸が開いて、何やら白

い食器と、銀色の皿を載せた白木の膳（ぜん）が這入って来るようである。

それを見た瞬間に、私は何かしらハッとさせられた。無意識のうちに今朝からの疑問の数々が頭の中で活躍し初めたのであろう。……吾（われ）を忘れて立上った。爪先走りに切戸の傍（かたわら）に駆け寄って、白木の膳を差入れている、赤い、丸々と肥った女の腕を狙（ねら）いすまして無手（むず）と引っ掴んだ。……と……お膳とトースト麵包（パン）と、野菜サラダの皿と、牛乳の瓶とがガラガラと床の上に落ち転がった。

私はシャ嘎（が）れた声を振り絞った。

「……どうぞ……どうぞ教えて下さい。僕は……僕の名前は、何というのですか」

「……………」

相手は身動き一つしなかった。白い袖口（そでぐち）から出ている冷めたい赤大根みたような二の腕が、私の左右の手の下で見える見る紫色になって行った。

「……僕は……僕の名前は……何というのですか。……僕は狂人（きちがい）でも……何でもない……」

「……アレエ——ッ……」

という若い女の悲鳴が切戸の外で起った。私に掴まれた紫色の腕が、力なく藻搔（もが）き初めた。

「……誰か……誰か来て下さい。七号の患者さんが……アレッ。誰か来てエ——ッ……」

「……シッシッ。静かに静かに……黙って下さい。僕は誰ですか。ここは……今はいつ……どこなんですか……どうぞ……ここは……そうすれば離します……」

……ワ——アッ……という泣声起った。その瞬間に私の両手の力が弛（ゆる）んだらしく、女の腕がスッポリと切戸の外へ脱（ぬ）け出したと思うと、同時に泣声がピツタリと止んで、廊下の向うの方へバタバタと走って行く足音が聞えた。

一所懸命に縋（すが）り付いていた腕を引き抜かれて、ハズミを喰（くら）った私は、固い人造石の床の上にドタリと尻餅（しりもち）を突いた。あぶなく引っくり返るところを、両手で支え止めると、気抜けしたようにそこいらを見まわした。

すると……又、不思議な事が起った。

今まで一所懸命に張り詰めていた気もちが、尻餅を突くと同時に、みるみる弛んで来るに連（つ）れて、何とも知れない可笑（おか）しさが、腹の底からムクムクと湧き起り初めるのを、どうすることも出来なくなった。それは拙（とて）もタマラナイ程、変テコに可らしい……頭の毛が一本毎（ごと）にザワザワとふるえ出すほどの可笑しさであった。魂のドン底からセリ上って、全身をゆすぶり上げて、あとからあとから止（と）め度（ど）もなく湧き起って、骨も肉もバラバラになるまで笑わなければ、笑い切れない可笑しさであった。

……アッハッハッハッハッ。ナアーンだ馬鹿馬鹿しい。名前なんてどうでもいいじゃないか。忘れたってチットモ不自由はしない。俺は俺に間違いないじゃないか。アハアハアハアハアハ……。

こう気が付くと、私はいよいよたまらなくなつて、床の上に引っくり返った。頭を抱えて、胸をたたいて、足をバタバタさせて笑った。笑った……笑った……笑った。涙を嚙（の）んでは咽（む）せかえって、身体（からだ）を振（よ）じらせ、捻（ね）じりまわしつつ、ノタ打ちまわりつつ笑いころげた。

……アハハハハ。こんな馬鹿な事が又とあろうか。

……天から降ったか、地から湧いたか。エタイのわからない人間がここに一人居る。俺はこん

な人間を知らない。アハハハハハハハ.....。

.....今までどこで何をしていた人間だろう。そうしてこれから先、何をするつもりなんだろう。何が何だか一つも見当が附かない。俺はタッタ今、生れて初めてこんな人間と識（し）り合いになったのだ。アハハハハハ.....。

.....これはどうした事なのだ。何という不思議な、何という馬鹿げた事だろう。アハ.....

アハ.....可笑（おか）しい可笑しい.....アハアハアハアハアハ.....。

.....ああ苦しい。やり切れない。俺はどうしてコンナに可笑しいのだろう。アッハッハッハッハッハッハッ.....。

私はこうして止（と）め度（ど）もなく笑いながら、人造石の床の上を転がりまわっていたが、そのうちに私の笑い力が尽きたかして、やがてフツツリと可笑しくなくなったので、そのままムックリと起き上った。そうして眼の球（たま）をコスリまわしながらよく見ると、すぐ足の爪先の処に、今の騒動のお名残りの三切れのパンと、野菜の皿と、一本のフォークと、栓（せん）をしたままの牛乳の瓶とが転がっている。

私はそんな物が眼に付くと、何故という事なしにタッター一人で赤面させられた。同時に堪え難い空腹に襲われかけている事に気が付いたので、傍に落ちていた帯を締め直すや否や、右手を伸ばして、生温かい牛乳の瓶を握りつつ、左手でバタを塗（な）すくった焼麩麩（パン）を掴んでガツガツと喰いはじめた。それから野菜サラダをフォークに突っかけて、そのトテモたまらないお美味（いし）さをグルグルと頬張って、グシャグシャと噛んで、牛乳と一緒にゴクゴクと嚥（の）み込んだ。そうしてスッカリ満腹してしまうと、背後（うしろ）に横わっている寝台の上に這い上って、新しいシートの上にゴロリと引っくり返って、長々と伸びをしながら眼を閉じた。

それから私は約十五分か、二十分の間ウトウトしていたように思う。満腹したせいか、全身の力がグツタリと脱け落ちて、掌（てのひら）と、足の裏がポカポカと温かくなって、頭の中がだんだんと薄暗いガラン洞になって行く.....その中の遠く近くを、いろんな朝の物音が行きかい、飛び違っては消え失せて行く.....そのカッターサ.....やる瀬なさ.....。

.....往来のざわめき。急ぐ靴の音。ゆっくりと下駄を引きずる音。自転車のベル.....どこか遠くの家で、ハタキをかける音.....。

.....遠い、高い処で鴉（からす）がカアカアと啼（な）いている.....近くの台所らしい処で、コップがガチャガチャと壊れた.....と思うと、すぐ近くの窓の外で、不意に甲走（かんばし）った女の声.....。

「.....イヤラッサナア.....マアホンニ.....タマガッタガ.....トッケムナカア.....ゾウタンノゴト.....イヒヒヒヒヒ.....」

.....そのあとから追いかけるように、私の腹の中でグーグーと胃袋が、よろこびまわる音.....。そんなものが一つ一つに溶け合って、次第次第に遥かな世界へ遠ざかって、ウツトリした夢心地になって行く.....その気持ちよさ.....ありがたさ.....。

.....すると、そのうちに、たった一つハッキリした奇妙な物音が、非常に遠い処から聞え初めた。それはたしかに自動車の警笛（サイレン）で、大きな呼子の笛みたように.....ピョッ...ピョッ.....ピョッピョッピョッピョッ.....と響く一種特別の高い音（ね）であるが、何だか恐ろしく急な用事があるって、私の処へ馳け付けて来るように思えて仕様がなかった。それが朝の静寂（しじま）を作る色んな物音をピョッピョッピョッピョッと超越し威嚇しつつ、市街らしい辻々をあっちへ曲り、こっちに折れつつ、驚くべき快速力で私の寝ている頭の方へ駈け寄って来るのであったが、やがて、それが見る見る私に迫り近付いて来て、今にも私の頭のモシャモシャ

した髪毛（かみのけ）の中に走り込みそうになったところで、急に横に外（そ）れて、大まわりをした。高い高い唸（うな）り声をあげて徐行しながら、一町ばかり遠ざかったようであったが、やがて又方向を換えて、私の耳の穴に沁（し）み入るほどの高い悲鳴を揚（あ）げつつ、急速度で迫り近付いて来たと思うと、間もなくピツタリと停車したらしい。何の物音も聞えなくなった。……同時に世界中がシンカンとなって、私の睡眠がシックリと濃（こま）やかになって行く……………。

……と思い思い、ものの五分間もいい心地になっていると、今度は私の枕元の扉の鍵穴が、突然にピシンと音を立てた。続いて扉が重々しくギイイ——ツと開いて、何やらガサガサと音を立てて這入って来た気はいがしたので、私は反射的に跳ね起きて振り返った。……が……眼を定めてよく見るとギョツとした。

私の眼の前で、緩（ゆる）やかに閉じられた頑丈な扉の前に、小型な籐椅子（とういす）が一個据（す）えられている。そうしてその前に、一個の驚くべき異様な人物が、私を眼下に見下しながら、雲を衝（つ）くばかりに突立っているのであった。

それは身長六尺（しゃく）を超えるかと思われる巨人（おおおとこ）であった。顔が馬のように長くて、皮膚の色は瀬戸物のように生白かった。薄く、長く引いた眉の下に、鯨（くじら）のような眼が小さく並んで、その中にヨボヨボの老人か、又は瀕死（ひんし）の病人みたような、青白い瞳が、力なくドンヨリと曇っていた。鼻は外国人のように隆々と聳（そび）えていて、鼻筋がピカピカと白光りに光っている。その下に大きく、横一文字に閉ざされた唇の色が、そこいらの皮膚の色と一（ひ）と続きに生白く見えるのは、何か悪い病気に罹（かか）っているせいではあるまいか。殊にその寺院の屋根に似たダダッ広い額（ひたい）の斜面と、軍艦の舳先（へさき）を見るような巨大な顎の恰好の気味のわるいこと……見るからに超人的な、一種の異様な性格の持主としか思えない。それが黒い髪毛をテカテカと二つに分けて、贅沢なものらしい黒茶色の毛皮の外套（がいとう）を着て、その間から揺らめく白金色（プラチナいろ）の逞ましい時計の鎖（くさり）の前に、細長い、蒼白（あおじろ）い、毛ムクジャラの指を揉（も）み合わせつつ、婦人用かと思われる華奢（きゃしゃ）な籐椅子の前に突立っている姿はさながらに魔法が何かを使って現われた西洋の妖怪のように見える。

私はそうした相手の姿を恐る恐る見上げていた。初めて卵から孵化（かえ）った生物（いきもの）のように、息を詰めて眼ばかりパチパチさして、口の中でオズオズと舌を動かしていた。けれどもそのうちに……サテはこの紳士が、今の自動車に乗って来た人物だな……と直覚したように思ったので、吾（わ）れ知らずその方向に向き直って座り直した。

すると間もなく、その巨大な紳士の小さな、ドンヨリと曇った瞳の底から、一種の威厳を含んだ、冷やかな光りがあらわれて来た。そうして、あべこべに私の姿をジリジリと見下し初めたので、私は何故となく身体（からだ）が縮むような気がして、自ずと項垂（うなだ）れさせられてしまった。

しかし巨大な紳士は、そんな事を些（すこ）しも気にかけていないらしかった。極めて冷静な態度で、一（ひ）とわたり私の全身を検分し終ると、今度は眼をあげて、部屋の中の様子をソロソロと見まわし初めた。その青白く曇った視線が、部屋の中を隅から隅まで横切って行く時、私は何故という事なしに、今朝眼を醒ましてからの浅ましい所業を、一つ残らず看破（みやぶ）られているような気がして、一層身体を縮み込ませた。……この気味の悪い紳士は一体、何の用事があって私の処へ来たのであろう……と、心の底で恐れ惑いながら……。

するとその時であった。巨大な紳士は突然、何かに脅やかされたように身体を縮めて前屈（まえごご）みになった。慌てて外套のポケットに手を突込んで、白いハンカチを掴み出して

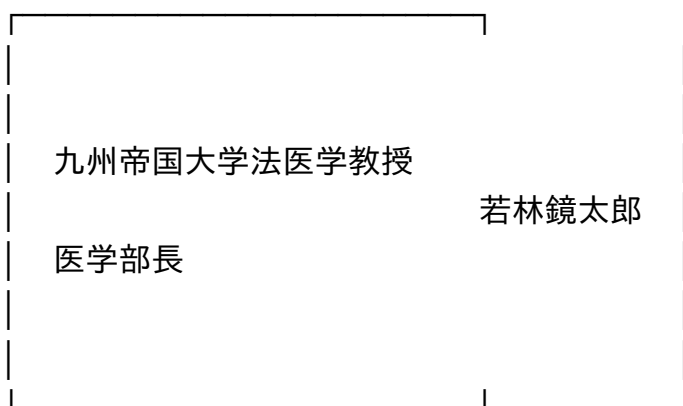
、大急ぎで顔に当てた。……と思う間もなく私の方に身体を反背（そむ）けつつ、全身をゆすり上げて、姿に似合わない小さな、弱々しい咳嗽（せき）を続けた。そうして稍（やや）暫らくしてから、やっと呼吸（いき）が落ち付くと、又、徐（おもむ）ろに私の方へ向き直って一礼した。

「……ドウモ……身体が弱う御座いますので……外套のまま失礼を……」

それは矢張（やは）り身体に釣り合わない、女みたような声であった。しかし私は、その声を聞くと同時に何かしら安心した気持になった。この巨大な紳士が見かけに似合わない柔和な、親切な人間らしく思われて来たので、ホッと溜息をしいしい顔を上げると、その私の鼻の先へ、恭（うやうや）しく一葉の名刺を差出しながら、紳士は又も咳（せ）き入った。

「……私はコ……ホンホン……御免……ごめん下さい……」

私はその名刺を両手で受け取りながらチョットお辞儀の真似型をした。



この名刺を二三度繰り返して読み直した私は、又も啞然（あぜん）となった。眼の前に咳嗽（せき）を抑えて突立っている巨大な紳士の姿をモウ一度、見上げ、見下ろさずにはいられなかった。そうして、

「……ここは……九州大学……」

と独言（ひとりごと）のように呟（つぶ）やきつつ、キョロキョロと左右を見廻わさずにはおられなくなった。

その時に巨人、若林博士の左の眼の下の筋肉が、微（かす）かにビクリビクリと震えた。或（あるい）はこれが、この人物独特の微笑ではなかったかと思われる一種異様な表情であった。続いてその白い唇が、ゆるやかに動き出した。

「……さよう……ここは九州大学、精神病科の第七号室で御座います。どうもお寝（やす）みのところをお妨げ致しまして恐縮に堪えませぬが、かように突然にお伺い致しました理由と申しますのは他事（ほか）でも御座いませぬ。……早速ですが貴方は先刻（さきほど）、食事係の看護婦に、御自分のお名前をお尋ねになりましたそうで……その旨を宿直の医員から私に報告して参りましたから、すぐにお伺い致しました次第で御座いますが、如何（いかが）で御座いましょうか……もはや御自分のお名前を思い出されましたでしょうか……御自分の過去に関する御記憶を、残らず御回復になりましたでしょうか……」

私は返事が出来なかった。やはりポカンと口を開いたまま、白痴のように眼を白黒さして、鼻の先の巨大な顎を見上げていた……ように思う。

……これが驚かずにいられようか。私は今朝から、まるで自分の名前の幽霊に付きまといわ

いるようなものではないか。

私が看護婦に自分の名前を訊ねてから今までの間はまだ、どんなに長くとも一時間と経っていない、その僅かな間に病気を押して、これだけの身支度をして、私が自分の名前を思い出したかどうかを問い訊すべく駈け付けて来る……その薄気味のわるいスバシコサと不可解な熱心さ……。

私が、私自身の名前を思い出すという、タッタそれだけの事が、この博士にとって何故に、それ程の重大事件なのであろう……。

私は二重三重に面喰わせられたまま、掌（てのひら）の上の名刺と、若林博士の顔を見比べるばかりであった。

ところが不思議なことに若林博士も、私のそうした顔を、瞬（またたき）一つしないで見下しているのがあった。私の返事を待つつもりらしく、口をピッタリと閉じて、穴のあく程私の顔を凝視しているのであったが、その緊張した表情には、何かしら私の返事に対して、重大な期待を持っている心構えが、アリアリと現われているのであった。私が自分自身の名前を、過去の経歴と一緒に思い出すか、出さないかという事が、若林博士自身と何かしら、深い関係を持っているに違いない事が、いよいよたしかにその表情から読み取られたので、私は一層固くなってしまったのであった。

二人はこうして、ちょっとの間（ま）、睨（にら）み合いの姿になった……が……そのうちに若林博士は、私が何の返事もし得ない事を察したかして、如何（いか）にも失望したらしくソット眼を閉じた。けれども、その瞼（まぶた）が再び、ショボショボと開かれた時には、前よりも一層深い微笑が、左の頬から唇へかけて現われたようであった。同時に、私が呆然となっているのを、何か他の意味で面喰っているものと感違いしたらしく、微（かす）かに二三度うなずきながら唇を動かした。

「……御尤（ごもつと）もです。不思議に思われるのは御尤も千万です。元来、法医学の立場を厳守していなければなりません私が、かように精神病科の仕事に立入りますのは、全然、筋違いに相違ないので御座いますが、しかし、これにつきましては、万止むを得ませぬ深い事情が……」

と云いさした若林博士は、又も、咳嗽（せき）が出そうな身構えをしたが、今度は無事に落付いたらしい。ハンカチの蔭で眼をしばたたきながら、息苦しうに言葉を続けた。

「……と申しますのは、ほかでも御座いません。……実を申しますとこの精神病科教室には、ついこの頃まで正木敬之（まさきけいし）という名高いお方が、主任教授として在任しておられたので御座います」

「……マサキ……ケイシ……」

「……さようで……この正木敬之というお方は、独り吾国のみならず、世界の学界に重きをなしたお方で、従来から行詰（ゆきつま）ったままになっております精神病の研究に対して、根本的の革命を起すべき『精神科学』に対する新学説を、敢然として樹立されました、偉大な学者で御座います……と申しましても、それは無論、今日まで行われて参りましたような心靈学とか、降神術とか申しますような非科学的な研究では御座いませぬ。純然たる科学の基礎に立脚して編み出されました、劃時代的（かくじだいてき）の新学理に相違ありませぬ事は、正木先生がこの教室内に、世界に類例の無い精神病の治療場を創設されまして、その学説の真理である事を、着々として立証して来られました一事を見ましても、たやすく首肯（しゅこう）出来るので御座います。……申すまでもなく貴方（あなた）も、その新式の治療を受けておいでになりました、お一人なのですが……」

「僕が……精神病の治療……」

「さようで……ですから、その正木先生が、責任をもって治療しておられました貴方に対して、法医学専門の私が、かように御容態をお尋ねするというのは、取りも直さず、甚しい筋違いに相違ないので、只今のように貴方から御不審を受けますのも、重々御尤（ごもつとも）千万と存じているので御座いますが……しかし……ここに遺憾千万な事には、その正木先生が、この一ヶ月以前に、突然、私に後事を托されたまま永眠されたので御座います。……しかも、その後任教授がまだ決定致しておりませぬ、適当な助教授も以前から居ないままになっておりました結果、総長の命を受けまして、当分の間、私がこの教室の仕事を兼任致しているような次第で御座いますが……その中でも特に大切に、全力を尽して御介抱申上げるように、正木先生から御委託を受けまして、お引受致しましたのが、外（ほか）ならぬ貴方で御座いました。言葉を換えて申しますれば、当精神病科の面目、否、九大医学部全体の名誉は目下のところ唯一つ……あなたが過去の御記憶を回復されるか否か……御自身のお名前を思い出されるか、否かに懸（かか）っていると申しましても、よろしい理由があるので御座います」

若林博士がこう云い切った時、私はそこいら中が急に眩（まぶ）しくなったように思って、眼をパチパチさした。私の名前の幽霊が、後光を輝やかしながら、どこかそこいらから現われて来そうな気がしたので……。

……けれども……その次の瞬間に私は、顔を上げる事も出来ないほどの情ない気持に迫られて、われ知らず項垂（うなだ）れてしまったのであった。

……ここはたしかに九州帝国大学の中の精神病科の病室に違いない。そうして私は一個の精神病患者として、この七号室？ に収容されている人間に相違ないのだ。

……私の頭が今朝、眼を醒した時から、どことなく変調子なように思われて来たのは、何かの精神病に罹（かか）っていた……否。現在も罹っている証拠なのだ。……そうだ。私はキチガイなのだ。

……嗚呼。私が浅ましい狂人（きちがい）……。

……というような、あらゆるタマラナイ恥かしさが、叮嚀（ていねい）過ぎるくらい叮嚀な若林博士の説明によって、初めて、ハッキリと意識されて来たのであった。それに連（つ）れて胸

が息苦しい程ドキドキして来た。恥かしいのか、怖ろしいのか、又は悲しいのか、自分でも判然（わか）らない感情のために、全身をチクチクと刺されるような気がして、耳から首筋のあたりが又もカッカと火熱（ほて）って来た。……眼の中が自然（おのず）と熱くなって、そのままベッドの上に突伏したいほどの思いに充（みた）されつつ、かなしく両掌（りょうて）を顔に当てて、眼がしらをソッと押え付けたのであった。

若林博士は、そうした私の態度を見下しつつ、二度ばかりゴクリゴクリと音を立てて、唾液（つば）を呑み込んだようであった。それから、恰（あたか）も、貴（たつと）い身分の人に対するように、両手を前に束（たば）ねて、今までよりも一層親切な響（ひびき）をこめながら、殆ど猫撫で声かと思われる口調で私を慰めた。

「御尤もです。重々、御尤もです。どなたでもこの病室に御自分自身を発見されます時には、一種の絶望に近い、打撃的な感じをお受けになりますからね。……しかし御心配には及びませぬ。貴方はこの病棟に這入っている他の患者とは、全く違った意味で入院しておいでになるのですから……」

「……ボ……僕が……ほかの患者と違う……」

「……さようで……あなたは只今申しました正木先生が、この精神病科教室で創設されました『狂人の解放治療』と名付くる劃時代的な精神病治療に関する実験の中でも、最貴重な研究材料として、御一身を提供された御方で御座いますから……」

「……僕が……私が……狂人（きちがい）の解放治療の実験材料……狂人（きちがい）を解放して治療する……」

若林博士は心持ち上体を前に傾けつつ首肯（うなず）いた。「狂人解放治療」という名前に敬意を表するかのよう……。

「さようさよう。その通りで御座います。その『狂人解放治療』の実験を創始されました正木先生の御人格と、その編み出されました学説が、如何に劃時代的なものであったかという事は、もう間もなくお解りになる事と思いますが、しかも……貴方は既に、貴方御自身の脳髓の正確な作用によって、その正木博士の新しい精神科学の実験を、驚くべき好成績の裡（うち）に御完成になりまして、当大学の名前を全世界の学界に印象させておいでになったので御座います。……のみならず貴方は、その実験の結果としてあらわれました強烈な精神的の衝動（ショック）のために御自身の意識を全く喪失しておられましたのを、現在、只今、あざやかに回復なされようとしておいでになるので御座います。……で御座いますから、申さば貴方は、その解放治療場内で行われました、或る驚異すべき実験の中心的な代表者でおいでになりますと同時に、当九大の名誉の守り神とも申すべきお方に相違ないので御座います」

「……そ……そんな恐ろしい実験の中心に……どうして僕が……」

と私は思わず急（せ）き込んで、寝台の端にニジリ出した。あまりにも怪奇を極めた話の中心にグングン捲き込まれて行く私自身が恐ろしくなったので……。その私の顔を見下しながら、若林博士は今迄よりも一層、冷静な態度でうなずいた。

「それは誠に御尤も千万な御不審です。……が……しかしその事に就（つき）ましては遺憾ながら、只今ハッキリと御説明申上る訳に参りませぬ。いずれ遠からず、あなた御自身に、その経過を思い出されます迄は……」

「……僕自身に思い出す。……そ……それはドウして思い出すので……」

と私は一層急（せ）き込みながら口籠（くちごも）った。若林博士のそうした口ぶりによって、又もハッキリと精神病患者の情なさを思い出させられたように感じたので……。

しかし若林博士は騒がなかった。静かに手を挙げて私を制した。

「……ま……ま……お待ち下さい。それは斯様（かよう）な仔細（わけ）で御座います。……実を申しますと貴方が、この解放治療場にお這入りになりました経過に就きましては、実に、一朝一夕に尽されぬ深刻複雑な、不可思議を極めた因縁が伏在しておるので御座います。しかもその因縁のお話と申しますのは、私一個の考えで前後の筋を纏めようと致しますと、全部が虚構（うそ）になって終（しま）う虞（おそ）れがありますので……詰（つま）るところそのお話の筋道に、直接の体験を持っておいでになる貴方が、その深刻不可思議な体験を御自身に思い出されたものでなければ、誰しも真実のお話として信用する事が出来ないという……それほど左様に幻怪、驚異を極めた因縁のお話が貴方の過去の御記憶の中に含まれているので御座います……が併（しか）し……当座の御安心のために、これだけの事は御説明申上ても差支えあるまいと思われれます。……すなわち……その『狂人の解放治療』と申しますのは、本年の二月に、正木先生が当大学に赴任されましてから間もなく、その治療場の設計に着手されましたもので、同じく七月に完成致して、僅々（きんきん）四箇月間の実験を行われました後（のち）、今からちょうど一箇月前の十月二十日に、正木先生が亡くなられますと同時に閉鎖される事になりましたのですが、しかも、その僅かの間に正木先生が行われました実験と申しますのは、取りも直さず、貴方の過去の御記憶を回復させる事を中心と致したもので御座いました。そうしてその結果、正木先生は、ズット以前から一種の特異な精神状態に陥っておられました貴方が、遠からず今日の御容態に回復されるに相違ない事を、明白に予言しておられたので御座います」

「……亡くなられた正木博士が……僕の今日の事を予言……」

「さようさよう。貴方を当大学の至宝として、大切に御介抱申上げているうちには、キット元の通りの精神意識に立ち帰られるであろう。その正木先生の偉大な学説の原理を、その原理から生れて来た実験の効果を、御自身に証明されるであろうことを、正木先生は断々乎として言明しておられたので御座います。……のみならず、果して貴方が、正木先生のお言葉の通りに、過去の御記憶の全部を回復される事に相成りますれば、その必然的な結果として、貴方が嘗（かつ）て御関係になりました、殆んど空前とも申すべき怪奇、悽愴を極めた犯罪事件の真相をも、同時に思い出されるであろう事を、かく申す私までも、信じて疑わなかったので御座います。むろん、只今も同様に、その事を固く信じているので御座いますが……」

「……空前の……空前の犯罪事件……僕が関係した……」

「さよう。とりあえず空前とは申しましたものの、或（あるい）は絶後になるかも知れぬと考えられておりますほどの異常な事件で御座います」

「……そ……それは……ドンナ事件……」

と、私は息を吐く間もなく、寝台の端に乗り出した。

しかし若林博士は、どこまでも落付いていた。端然として佇立（ちよりつ）したままスラスラと言葉を続けて行った。その青白い瞳で、静かに私を見下しながら……。

「……その事件と申しますのは、ほかでも御座いませぬ。……何をお隠し申しましょう。只今申しました正木先生の精神科学に関する御研究に就きましては、かく申す私も、久しい以前から御指導を仰いでおりましたので、現に只今でも引続いて『精神科学応用の犯罪』に就いて、研究を重ねている次第で御座います が……」

「……精神科学……応用の犯罪……」

「さようで……しかし単にそれだけでは、余りに眼新しい主題（テーマ）で御座いますから、内容がお解かりにならぬかも知れませぬが、斯様（かよう）申上げましたならば大凡（おおよそ）、御諒解が出来ましょう。……すなわち私が、斯様な主題（テーマ）に就いて研究を初めました抑々（そもそも）の動機と申しますのは、正木先生の唱え出された『精神科学』そのものの

内容が、あまりに恐ろしい原理、原則にみちみちていることを察知致しましたからで御座います。たとえば、その精神科学の一部門となっております『精神病理学』の中には、一種の暗示作用によって、人間の精神状態を突然、別人のように急変化させ得る……その人間の現在の精神生活を一瞬間に打ち消して、その精神の奥底の深い処に潜在している、何代か前の祖先の性格と入れ換させ得る……といったような戦慄すべき理論と実例が、数限りなく含まれておりますので……しかもその理論と申しますのは、その応用、実験の効果が、飽く迄も科学的に的確、深刻なものがありますにも拘わらず、その作用の説明とか、実行の方法とかいうものは、従来の科学と違ひまして極めて平々凡々な……説明の仕様によっては女子供にでも面白可笑（おか）しく首肯出来る程度のものでありますからして、考えようによりましては、これ程の危険な研究、実験はないので御座います。……もちろんその詳細な内容は遠からず貴方の眼の前に、歴々（ありあり）と展開致して来る事と存じますから、ここには説明致しませぬが……」

「……エッ……エッ……そんな恐ろしい研究の内容が……僕の眼の前に……」

若林博士は、いとも荘重にうなずいた。

「さようさよう。貴方は、その学説の真理である事を、身を以（もつ）て証明されたお方ですから、そうした原理が描きあらわす恐怖、戦慄に対しては一種の免疫になっておいでになりますばかりでなく、近い将来に於て、御自分の過去に関する御記憶を回復されました暁（あかつき）には、必然的に、この新学理の研究に参加される権利と、資格を持っておいでになる事を自覚される訳で御座いますが、しかし、それ以外の人々に、万一、この秘密の研究の内容が洩（も）れましたならば、どのような事象が発生するか、全然、予想が出来ないので御座います。……たとえば或る人間の心理の奥底に潜在している一つの恐ろしい遺伝心理を発見して、これに適応した一つの暗示を与える時は、一瞬間にその人間を発狂させる事が出来る。同時にその人間を発狂させた犯人に対する、その人間の記憶力までも消滅させ得るような時代が来たとなりましたならば、どうでしょうか。その害毒というものは到底、ノーベル氏が発明しました綿火薬の製造法が、世界の戦争を激化した比では御座いますまい。

……で御座いますからして私は、本職の法医学の立場から考えまして、将来、このような精神科学の理論が、現代に於ける唯物科学の理論と同様に一般社会の常識として普及されるような事になっては大変である。その時には、現代に於て唯物科学応用の犯罪が横行しているのと同様に、精神科学応用の犯罪が流行するであろう事を、当然の帰結として覚悟しなければならない訳であるが、しかしそうなったら最早（もはや）、取返しの附けようがないであろう。この精神科学応用の犯罪が実現されるとなれば、昨今の唯物科学応用の犯罪とは違って、殆ど絶対に検察、調査の不可能な犯罪が、世界中の到る処に出現するに相違ない事が、前以て、わかり切っているのでありますからして、とりあえず正木先生の新学説は、絶対に外部に公表されないように注意して頂かねばならぬ。……と同時に、甚だ得手（えて）勝手な申し分のような御座いますが、万一の場合を予想しまして、この種の犯罪の予防方法と、犯罪の検出探索方法を、出来る限り周到に研究しておかねばならぬ……と考えましたので、久しい以前から正木先生の御指導の下に『精神科学応用の犯罪と、その証跡』と題しまするテーマの下に、極度の秘密を厳守しつつ、あらゆる方面から調査を進めておったところで御座います。つまりところ正木先生と私と二人の共同の事業といったような恰好で……。

……ところが、その正木先生と、私と二人の間に如何なる油断が在ったので御座いますよ。……それ程に用心致しておりましたにも拘わらず、いつ、如何なる方法で盗み出したものか、その精神科学の中（うち）でも最も強烈、深刻な効果を現わす理論を、いとも鮮やかに実地に応用致しました、一つの不可思議な犯罪事件が、当大学から程遠からぬ処で、突然に発生したの

で御座います。……すなわちその犯罪の外観（アウトライン）と申しますは、或る富裕な一家の血統に属する数名の男女を、何等の理由も無いままお互い同志に殺し合わせ、又は発狂させ合ってしまったという、残忍冷血、この上もない兇行を中心として構成されているので御座います。……しかも、その兇行の手段が、私どもの研究致しております精神科学と関係を保っております事実が、確認されるようになりました端緒と申しますのは、やはりその富裕な一家の最後の血統に属する一人の溫柔（おとな）しい、頭脳の明晰な青年の身の上に行った事件で御座います。……つまりその青年が、滅びかかっている自分の一家の血統を繋（つな）ぎ止めるべく、自分を恋い慕っている美しい従妹（いとこ）と結婚式を挙げる事になりました、その前の晩の夜半（よなか）過ぎに、その青年が、思いもかけぬ夢中遊行（むちゅうゆうこう）を起しまして、その少女を絞殺してしまいました。そうしてその少女の屍体（したい）を眼の前に横たえながら、冷静な態度で紙を拡げて写生をしていた……という、非常に特異な、不可思議な事実が曝露されまして、大評判になってからの事で御座います……が……同時に、その青年の属する一家の血統を、そんなにまで悲惨な状態に陥ってしまったのが、何の目的であったかという事実とその犯人が何人（なんびと）であるかという、この二つの根本問題だけは、今日までも依然として不明のままになっているという……どこまで奇怪、深刻を極めていくか判然（わか）らない事件で御座います。……九州の警視庁と呼ばれております福岡県の司法当局も、この事件に限っては徹頭徹尾、無能と同じ道を選んだ形になっておりますので、同時に、正木先生の御援助の下に、全力を挙げて該（がい）事件の調査に着手致しました私も、今日に到るまで、事件の真相に対して何等の手掛りも掴み得ないまま、五里霧中に彷徨させられているような状態で御座います。

……で……そのような次第で御座いますからして、現在、私の手に残っております該事件探究の方法は、唯一つ……すなわち、その事件の中心人物となって生き残っておいでになる貴方御自身が、正木先生の御遺徳によって過去の御記憶を回復されました時に、直接御自身に、その事件の真相を判断して頂くこと……その犯行の目的と、その犯人の正体を指示して頂くこと……この一途（いっと）よりほかに方法は無い事に相成りました。それほど左様に神変自在な手段をもって、その事件の犯人たる怪魔人は、踪跡（そうせき）を晦（くら）ましているのです。……こう申しましたならば、もはやお解かりで御座いましょう。その事件に就いて、私自身の口から具体的の説明を申し上げかねる理由と申しますのは、私自身が、その事件の真相を確かめておりませぬからで御座います。又……かように私が、専門外の精神病科の仕事に立ち入って、自身に貴方の御介抱を申上げておりますのも、そうした重大な秘密の漏洩を警戒致したいからで、同時に、万一、貴方の御記憶が回復いたしました節には、時を移さず駈け付けまして、誰よりも先に、その事件の真相も聞かして頂かねばならぬ……その事件の真相を蔽（おお）い晦（くら）ましている怪魔人の正体を曝露して頂かねばならぬ……という考えからで御座います。……しかも万一、貴方が過去の御記憶を回復されましたお蔭で、この事件の真相が判明致すことに相成りますれば、その必然の結果として、実に、二重、三重の深長な意味を持つ研究発表が、現代の科学界と、一般社会との双方に投げかけられまして、世界的のセンセーションを捲き起すことに相成りましょう。すなわち正木先生が表面上、仮に『狂人の解放治療』と名付けておられました御研究……実は、現代の物質文化を一撃の下に、精神文化に転化し得る程の大実験の、最後の結論とするべき或る重大な事実が、科学的に立証されまするばかりでなく、同時に、同先生の御指導の下に、私が研究を続けております『精神科学応用の犯罪と、その証跡』と名付ける論文の中（うち）の、最も重要な例証の一つをも、遺憾なく完備させて頂ける事になるので御座います。そうして正木先生と私とが、この二十年の間、心血を傾注して参りました精神科学に関する研究が、同時に公表され得る機会を与えて頂ける事に相成るので御座います。……で御座いま

すからして、あなたが果して御自身のお名前を思い出されるかどうか。過去の御記憶を回復されて、その事件の真相を明らかにされるかどうか……という事に就(つ)きましては、そのような二重、三重の意味から、当大学の内部、もしくは福岡県の司法当局のみならず、満天下の視聴が集中致しております次第で御座います。……然(しか)るに……」

ここまで一気に説明して来た若林博士は、フト奇妙な、青白い一瞥(いちべつ)を私に与えた。……と思うと、又もやクルリと横を向いて、ハンカチを顔に押し当てながら、一所懸命に咳入り初めたのであった。

その皺(しわ)だらけに痙攣(ひきつ)った横顔を眺めながら、私は煙に捲かれたように茫然となっていた。今朝から私の周囲にゴチャゴチャと起って来る出来事が、何一つとして私に、新しい不安と、驚きとを与えないものは無い……しかも、それに対する若林博士の説明が又、みるみる大袈裟(おおげさ)に、超自然的に拡大して行くばかりで、とても事実とは思えない……私の身の上に関係した事ばかりのように聞えながら、実際は私と全く無関係な、夢物語みたような感じに変わって行くように感じつつ……。

すると、そのうちに咳嗽(せき)を収めた若林博士は又一つジロリと青白い目礼をした。

「御免下さい。疲れますので……」

と云ううちに、やおら背後(うしろ)の華奢(きゃしゃ)な籐椅子(とういす)を振り返って、ソロソロと腰を卸(おろ)したのであったが、その風付(ふうつ)きを見ると私は又、思わず眼を反(そ)らさずにはいられなかった。

初め、その籐椅子が、若林博士の背後に据えてあるのを見た時には、すこし大きな人が腰をかけたなら、すぐにも潰れそうに見えたので、まだほかに誰か、女の人でも来るのか知らん……くらいに考えていた。ところが今見ていると、若林博士の長大な胴体は、その椅子の狭い肘掛けの間に、何の苦もなくスッポリと這入った。そうして胸と、腹とを二重に折り畳んで、ハンカチから眼ばかり出した顔を、膝小僧に乗っかる位低くして来ると、さながらに……私が、その怪事件の裏面に潜む怪魔人で御座います……というかのように、グズグズと縮こまって、チョコナンと椅子の中に納まってしまった。その全体の大きさは、どう見ても今までの半分ぐらいしかないので、どんなに瘠(やせ)こけているにしても……その外套の毛皮が如何に薄いものであるにしても、とても尋常な人間の出来る芸当とは思えない。しかも、その中から声ばかりが元の通りに……否……腰を落ち付けたせいか一層冷静に……何もかも私が存じております……という風に響いて来るのであった。

「……どうも失礼を……然るに私が、只今お伺い致しまして、あなたの御様子を拝見してみますと、正木先生の予言が神の如くに的中して参りますことが、専門外の私にもよくわかるので御座います。貴方は現在、御自分の過去に関する御記憶を回復しよう回復しようと、お勉(つ)めになりながら、何一つ思い出す事が出来ないのです、お困りになっていられるで御座いましょう。それは貴方が、この実験におかかりになる以前の健康な精神意識に立ち帰られる途中の、一つの過程に過ぎないので御座います。……すなわち正木先生の御研究によりますと、貴方の脳髓の中で、過去の御記憶を反射、交感致しております部分の中でも、一番古い記憶に属する潜在意識を支配しておりますところの或る一個所に、遺伝的の弱点、すなわち非常な敏感さを持った或る一点が存在しておったので御座います。

……ところが又一方に、そうした事実を以前からよく知っている、不可思議な人物が、どこかに居(お)ったので御座いましょう。ちょうどその最も敏感な弱点をドン底まで刺戟する、極めて強烈な精神科学的の暗示材料を用いまして、その一点を極度の緊張に陥れました結果、そこに

遺伝、潜在しておりました貴方の古い古い一千年前の御先祖の、怪奇、深刻を極めたローマンスに関する記憶が、スッカリ遊離してしましまして、貴方の意識の表面に浮かみ現われながら、貴方を深い深い夢中遊行（むちゅうゆうこう）状態に陥れる事に相成りました。……そうして今日に立ち到りますと、その潜在意識の中から遊離し現われました夢中遊行心理が残らず発揮しつくされまして、空無の状態に立ち帰りましたために、只今のようにその夢遊状態から離脱される事になった訳で御座いますが、しかしその異状な活躍を続けて参りました潜在意識の部分と、その附近に在る過去の御記憶を反射交感する脳髓の一部分は、長い間の緊張から来た、深刻な疲労が残っておりますために、只今のところでは全く自由が利かなくなっております。つまり古い記憶であればある程、思い出せない状態に陥っておられるので御座います。……そこで、今まで、さほどに疲れていなかった、極めて印象の新しい、最近の出来事を反射交感する部分だけが今朝ほどから取りあえず覚醒致しまして、もっと以前の記憶を回復しよう回復しようと焦燥（あせり）ながら、何一つ思い出せないでいる……というのが現在の貴方の精神意識の状態であると考えられます。正木先生はそのような状態を仮りに『自我忘失症』と名付けておられましたが……」

「……自我……忘失症……」

「さようで……あなたはその怪事件の裏面に隠れている怪犯人の精神科学的な犯罪手段にかかられました結果、その以後、数箇月の間というもの、現在の貴方とは全く違った別個の人間として、或る異状な夢中遊行状態を続けておられたので御座います。……もちろんこのような深い夢中遊行状態、もしくは極端な二重人格の実例は、普通人によくあらわれる軽度の二重人格的夢遊……すなわち『ネゴト』とか『ネットボケ』とかいう程度のものとは違ひまして、極めて稀有（けう）のものではありますが、それでも昔からの記録文献には、明瞭に残っている事実が発見されます。たとえば『五十年目に故郷を思い出した老人』とか又は『証拠を突き付けられてから初めて、自分が殺人犯人であった事を自覚した紳士の感想録』とか『生んだ記憶（おぼえ）の無い実子に会った孤独の老嬢の告白』『列車の衝突で気絶したと思っている間（ま）に、禿頭（とくとう）の大富豪になっていた貧青年の手記』『たった一晩一緒に睡った筈の若い夫人が、翌朝になると白髪（しらが）の老婆に変わっていた話』『夢と現実とを反対に考えたために、大罪を犯すに到った聖僧の懺悔譚（ざんげものがたり）』なぞいう奇怪な実例が、色々な文献に残存しておりまして、世人を半信半疑の境界（さかい）に迷わせておりますが、そのような実例を、只今申しました正木先生独創の学理に照してみますと、もはや何人も疑う余地がなくなるので御座います。そのような現象の实在が、科学的に可能であることが、明白、切実に証拠立てられますばかりでなく、そんな人々が、以前（もと）の精神意識に立ち帰ります際には、キット或る長さの『自我忘失症』を経過することまでも、学理と、実際の両方から立証されて来るので御座います。……すなわち厳密な意味で申しますと、吾々（われわれ）の日常生活の中で、吾々の心理状態が、見るもの聞くものによって刺戟されつつ、引切りなしに変化して行く。そうしてタッター一人で腹を立てたり、悲しんだり、ニコニコしたりするのは、やはり一種の夢中遊行でありまして、その心理が変化して行く刹那（せつな）刹那の到る処には、こうした『夢中遊行』『自我忘失』『自我覚醒』という経過が、極度の短かさで繰返されている。……一般の人々は、それを意識しないだけで……という事実をも、正木先生は併せて立証していただけるので御座います。……ですから、申すまでもなく貴下（あなた）も、その経過をとられまして、遠からず、今日只今の御容態に回復されるであろう事を、正木先生は明かに予知しておられましたので、残るところは唯、時日の問題となっていたので御座います」

若林博士はここで又、ちょっと息を切って、唇を舐（な）めたようであった。

しかし私がこの時に、どんな顔をしていたか私は知らない。ただ、何が何やら解らないまま一句一句に学術的な権威をもって、急角度に緊張しつつ迫って来る、若林博士の説明に脅やかされて、高圧電気につけられたように、全身を固（こわ）ばらせていた。……さては今の話の怪事件というのは、矢張（やは）り自分の事であったのか……そうして今にも、その恐ろしい過去の事件を、自分の名前と一緒に思い出さなければならぬ立場に、自分が立っているのか……といったような、云い知れぬ恐怖から滴（した）たり落つる冷汗を、左右の腋の下ににじませつつ、目の前の蒼白長大な顔面に全神経を集中していた……ように思う。

その時に若林博士は、その仄青（ほのあお）い瞳（ひとみ）を少しばかり伏せて、今までよりも一層低い調子になった。

「……くり返して申しますが、そのような正木先生の予言は、今日まで一つ一つに寸分の狂いもなく的中して参りましたので御座います。あなたは最早（もはや）、今朝から、完全に、今までの夢中遊行的精神状態を離脱しておられまして、今にも昔の御記憶を回復されるであろう間際に立っておられるので御座います。……で御座いますから私は、とりあえず、先刻、看護婦にお尋ねになりました、貴下（あなた）御自身のお名前を思い出させて差上げるために、斯様（かよう）にお伺いした次第で御座います」

「……ボ……僕の名前を思い出させる……」

こう叫んだ私は、突然、息詰るほどドキッとさせられた。……もしかしたら……その怪事件の真犯人というのが私自身ではあるまいか。……若林博士が特に、私の名前について緊張した注意を払っているらしいのは、その証拠ではあるまいか……というような刹那的な頭のヒラメキに打たれたので……。しかし若林博士はさり気なく静かに答えた。

「……さよう。あなたのお名前が、御自身に思い出されますれば、それにつれて、ほかの一切の御記憶も、貴下の御意識の表面に浮かみ現われて来る筈で御座います。その怪事件の前後を一貫して支配している精神科学の原理が、如何に恐るべきものであるか。如何なる理由で、如何なる動機の下にそのような怪犯罪が遂行されたか。その事件の中心となっている怪魔人が何者であるかという真相の底の底までも同時に思い出される筈で御座います。……ですから、それを思い出して頂くように、お力添えを致しますのが、正木先生から貴方をお引受け致しました私の、責任の第一で御座いまして……」

私は又も、何かしら形容の出来ない、もの怖ろしい予感に対して戦慄させられた。思わず座り直して頓狂（とんきょう）な声を出した。

「……何というんですか……僕の名前は……」

私が、こう尋ねた瞬間に、若林博士は恰（あたか）も器械か何ぞのようにピッタリと口を噤（つぶ）んだ。私の心の中から何ものかを探し求めるかのように……又は、何かしら重大な事を暗示するかのように、ドンヨリと光る眼で、私の眼の底をジーツと凝視した。

後から考えると私はこの時、若林博士の測り知れない策略に乗せられていたに違いないと思う。若林博士がここまで続けて来た科学的な、同時に、極度に煽情的な話の筋道は、決して無意味な筋道ではなかったのだ。皆「私の名前」に対する「私の注意力」を極点にまで緊張させて、是非ともソレを思い出さずにはいられないように仕向けるための一つの精神的な刺戟方法に相違なかったのだ。……だから私が夢中になって、自分の名前を問うと同時に、ピッタリと口を噤んで、無言の裡（うち）に、私の焦燥をイヨイヨの最高潮にまで導こうと試みたのであろう。私の脳髓の中に凝固している過去の記憶の再現作用を、私自身に鋭く刺戟させようとしたのであろう。

しかし、その時の私は、そんなデリケートな計略にミジンも気づき得なかった。ただ若林博

士が、すぐにも私の名前を教えてくれるものとばかり思い込んで、その生白い唇を一心に凝視しているばかりであった。

すると、そうした私の態度を見守っていた若林博士は、又も、何やら失望させられたらしく、ヒッソリと眼を閉じた。頭をゆるゆると左右に振りながら軽いため息を一つしたが、やがて又、静かに眼を開きながら、今までよりも一層つめたい、繊細（かぼそ）い声を出した。

「……いけませぬ……。私が、お教え致しましたのでは何にもなりません。そんな名前は記憶せぬと仰言（おっしゃ）れば、それ迄です。やはり自然と、御自身に思い出されたのでなくては……」

私は急に安心したような、同時に心細くなったような気持ちでした。

「……思い出すことが出来ましようか」

若林博士はキッパリと答えた。

「お出来になります。きっとお出来になります。しかもその時には、只今まで私が申述べました事が、決して架空なお話でない事が、お解りになりますばかりでなく、それと同時に、貴方はこの病院から全快、退院されまして、あなたの法律上と道德上の権利……すなわち立派な御家庭と、そのお家に属する一切の幸福とをお引受けになる準備が、ずっと以前から十分に整っているので御座います。つまり、それ等のものの一切を相違なく貴方へお引渡し致しますのが又、正木先生から引き継がれました私の、第二の責任となっておりますので……」

若林博士は斯様（かよう）云い切ると、確信あるものの如くモウ一度、その青冷めたい瞳で私を見据えた。私はその瞳の力に圧（お）されて、余儀なく項垂（うなだ）れさせられた……。又も何となく自分の事ではないような……。妙なヤヤコシイ話ばかり聞かされて、訳が判然（わか）らないままに疲れてしまったような気持ちになりながら……。

しかし若林博士は、私のそうした気持ちに頓着なく、軽い咳払いを一つして、話の調子を改めた。

「……では……只今から、貴方のお名前を思い出して頂く実験に取りかかりたいと存じますが……私どもが……正木先生も同様に御座いましたが……貴方の過去の御経歴に最も深い関係を持っているに相違ないと信じております色々なものを、順々にお眼にかけまして、それによって貴方の過去の御記憶が喚（よ）び起されたか否かを実験させて頂きたいので御座いますが、如何（いかが）で御座いましょうか」

と云ううちに籐椅子の両脇に手をかけて、姿勢をグッと引伸ばした。

私はその顔を見守りながら、すこしばかり頭を下げた。……ちっとも構いません。どうなりと御随意に……という風に……。

しかし心の中では些（すく）なからず躊躇（ちゅうちょ）していた。否、むしろ一種の馬鹿馬鹿しさをさえ感じていた。

……今朝から私を呼びかけたあの六号室の少女も、現在眼の前に居る若林博士も同様に、人違いをしているのではあるまいか。

……私を誰か、ほかの人間と間違えて、こんなに熱心に呼びかけたり、責め附けたりしているのではあるまいか……だから、いつまで経っても、いくら責められてもこの通り、何一つとして思い出し得ないのではあるまいか。

……これから見せ付けられるであろう私の過去の記念物というのも、実をいうと、私とは縁もゆかりもない赤の他人の記念物ばかりではあるまいか。……どこかに潜み隠れている、正体のわからない、冷血兇悪な精神病患者……其奴（そいつ）が描きあらわした怪奇、残虐を極めた犯罪の記念品……そんなものを次から次に見せ付けられて、思い出せ思い出せと責め立てられ

るのではあるまいか。

.....といったような、あられもない想像を逞しくしながら、思わず首を縮めて、小さくなっていたのであった。